Rorschach Test における集団法と個別法の比較

佐藤　由香理

宮城学院女子大学　人文科学研究科

【目的】

集団ロールシャッハ・テストは個別法に比べ、その実施や研究は少ない。そこで、集団ロールシャッハ・テストとはどのようなものか、ということを明らかにする。また、集団ロールシャッハ・テストは個別法と「別種の検査」といわれている。そこで、両者を比較検討してみることを目的とする。

【方法】

〈被験者〉宮城学院女子大学の学生 33 名を対象に集団ロールシャッハ・テストを実施。その内、希望者８名に対し個別によるロールシャッハ・テストを行った。

〈テスト〉　J.P.S. Large Scale Rorschach Test

〈手続き〉　初めに集団ロールシャッハ・テストを行い、その約４ヵ月後に個別法によるロールシャッハ・テストを行った。

【結果と考察】

１．ロールシャッハ・テスト

適応の状態については、全体の約 90%の人は適応に問題がないという結果になった。

また、知的活動、常識性、情緒の安定性および自己統制、社会化された豊かな情緒については、全体の約 70%の人は普通という結果になり、極端に多い、少ないという人は見られなかった。

２．集団法と個別法の比較〉

まず、個別法８名の適応の型について調べた。

・独自性のある知的情緒適応型：被験者Ａ
・常識性のある知的適応型：被験者Ｈ
・独自性のある知的適応型：被験者Ｄ
・常識性のある情緒的適応型：被験者Ｂ,Ｃ,Ｆ,Ｇ
・独自性のある情緒的適応型：被験者Ｅ

次に、集団法と個別法の比較は、両者の解釈で対応がとれていると思われる 1.常識性（集団）とＡのＰ反応（個別）２.体験型プロット（個別）と適応型の分布（集団）３.適応型を判断する指標との一致度の３項目で行った。

その結果、ＡのＰ反応（表 1)、体験型（図 1）において、同じ適応の型の被験者Ｂ,Ｃ,Ｆ,Ｇについて見て見ると、どちらもばらつきがみられる。また、知的適応型、情緒的適応型の判断の指標の一致度も、一致しているものもあるが、１名を除きＭ＜Ｆ+＋ＦＣという結果から、それが妥当であるとは考えにくい（表 2)。したがって、個別法との対応はとれていないといえ、やはり、個別法とは別種の検査といえるのではないか。

表１：ＡのＰ反応（総数７個中）

被験者	反応数
B	3
C	4
F	2
G	4

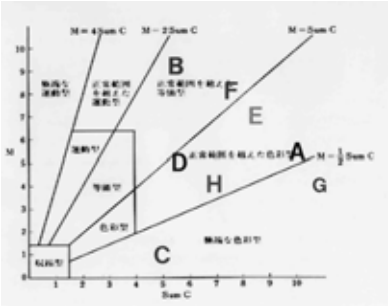

図１：体験型プロットと適応型の分布

それから、集団法は、領域と反応内容のみの選択式のため、被験者がなぜそう思ったのかということについては知り得ることができない。したがって、完全な投影法とはいい難く、質問紙法に近いともいえるのではないか。

個別法を行った８名に感想を聞いたところ、個別法のほうが色が鮮明に伝わる、集団の時より細かいところまでいろいろ見えてくる、選択式ではないので自分の見えたものが言えてよいということ、また、集団法は眠くなる、他の人が気になる、他にも人がいるから気楽、などという意見が多数あった。これらから、実施の条件の違いも別種の検査といえる要因に大きくかかわってくるのではないかと考えられる。

表２：知的適応か情緒的適応かを判断する指標との一致度

被験者	K1:K3＋K4	M:F++FC	一致
B	K1＜K3＋K4	M＜F++FC	一致
C	K1＜K3＋K4	M＜F++FC	一致
F	K1＜K3＋K4	M＝F++FC	不一致
G	K1＜K3＋K4	M＜F++FC	一致
E	K1＜K3＋K4	M＜F++FC	不一致
H	K1＞K3＋K4	M＜F++FC	不一致
D	K1＞K3＋K4	M＜F++FC	不一致
A	K1　K3＋K4	M＜F++FC	一致